The 28th Annual Meeting of the Japanese Siciety of Psychosomatic Pediatrics

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25869

『学会開催報告』

第28回日本小児心身医学学術集会
The 28th Annual Meeting of the Japanese Society of Psychosomatic Pediatrics

第28回日本小児心身医学学術集会　会長
（国立病院機構　医王病院）
関　　秀　　俊

平成22年9月10日から12日に，第28回日本小児心身医学会学術集会を金沢市の石川県文教会館にて開催させていただきました．この年の夏は例年になく大変暑く，厳暑・猛暑・酷暑でも表現できないほどでした．また学会直前に台風が石川県にこれも初めて直接上陸という予報がありかなり心配しましたが，直前に台風は進路を変更し太平洋側に抜け，学会開催期間中は天候に恵まれました．参加人数は3日間で延べ434名と予想以上の規模になりました．参加者の所属は，小児科医，児童精神科医，臨床心理士，作業療法士，養護教諭，保育士などで，子どもの心の問題に関心のある多職種の方々が集まりました．

今回の学会のメインテーマは，「子どもの心を育みレジリエンスを高める心身医療をめざして」といたしました．“レジリエンス”(resilience) という言葉は，1970年代から小児精神医学領域では，回復力，強靭性，打たれ強さという意味で使われています．特に現在のストレス社会の中では，子どもの心身症，虐待による精神障害，発達障害の二次障害などの発症や増悪を予防し軽減する力であるレジリエンスを身につける事が必要です．そこで会長講演は，「小児心身医療におけるレジリエンス」と題して，これまでのレジリエンス研究の歴史と概念の解説，そして研究の紹介として中学生の日常生活の中でのストレスに対するレジリエンスの構成要素とその役割を説明し，小児心身医学領域においても，子どものレジリエンスを意識した分析や関わりが今後ますます重要になることをお話ししました．

このようなレジリエンスを高めるには，セルフ・エスティーム（自尊感情）やコミュニケーション能力の要素を高めることが特に重要ですが，古荘純一先生（青山学院大学教育人間科学部）に「小児精神医学からみた日本の子どもの自尊感情」と題して教育講演をしていただき，現在の日本ではこども達の自尊感情が低くなっていることの問題性が指摘され，QOLを高めるためにも自尊感情を育てることの意義を教わりました．またコミュニケーション能力に関しては，最終日に高塚人志先生（鳥取大学医学部）に「共感に基づくコミュニケーション　ー心から人と真剣に向き合うことの大切さー」の公開研修会していただきました．この参加型研修会には多くの県内の関係者が参加していただき，コミュニケーションを取るにはお互いにまず関心を持つことがとても重要で，そして共感し向き合うことから始まることを身をもって感じる事のできた研修会となりました．

特別講演は，「自閉症の原因遺伝子と治療：オキシトシンをめぐって」と題して東田陽博先生（金沢大学子どものこころの発達研究センター長）に，マウスでの基礎研究の成果とその臨床応用としてのオキシトシンによる最新の自閉症治療の成果についての大変興味あるお話をしていただきました．

近年日本では成人のうつ病の著しい増加とそれに伴う自殺の増加が社会問題になってきていますが，小児期におけるうつ病に関してはさまざまな意見があり，多少混乱している部分も見られます．もう一つの教育講演は，こどものうつ病を正しく理解するために，原田謙先生（信州大学医学部子どものこころ診療部）に「子どものうつ病の特徴と治療」をしていただき，うつ気分，うつ状態，反応性うつ病，心因性うつ病，内因性うつ病の分類や診断に関して理解を深めることができました．

シンポジウムは，近年増加してきた小学生などの若年発症の摂食障害の課題を小児科医，養護教諭，管理栄養士などの多職種のシンポジストにより，「摂食障害の予防・早期介入と患者教育の実践」というテーマに沿って活発な意見交換がなされました．体重の変化から心の問題を早期に気づき，心と体の面から子どもの向き合うことの重要性を改めて認識できました．

本学会のユニークな教育活動としての研究委員会企画に，委員の先生方が診察場面の患者や家族役を演じて，若い会員に診察の実技指導をするものがあります．今回は「くり返すこどもの痛みの理解と対応」に関して熱演がみられました．回数を重ね演技も上達し，注意すべきポイントが理解しやすくなかなか見応えのあるものになりました．

一般演題は，発達障害，不登校，摂食障害，起立性調節障害，慢性疼痛などに関する演題が多く，この数年間での最高の83題集りました．若い人の発表も増加し，多職種間での活発な討議もなされ実りある学術集会にすることができました．

最後になりましたが，学会開催にあたり温かいご支援やご協力をしていただきました方々に心から感謝申し上げます．

公開研修会講師の高塚人志先生とスタッフ

研究委員企画の診察実技指導風景